

# フェノロサとパウンドの奇縁

——パウンドの「アダムズ・キャントウズ」を介して——

高田美一

## 要 旨

一八八六年七月三日、ヘンリー・アダムズと画家ジョン・ラ・ファージが日本を訪れ、フェノロサ一家とともに日光にて夏を過ごし、その後、フェノロサとともに鎌倉、京都、奈良、岐阜へと旅行し、日本古美術品を蒐集した。文部省派遣のヨーロッパ美術教育調査に出発するフェノロサと天心は、十月二日横浜出航のシテイ・オヴ・ペキン号でアダムズ、ラ・ファージと同船し親交を結んだ。一九四〇年、パウンドは「アダムズ・キャントウズ」を出したが、それはアダムズ家のアメリカ建国の父祖第二代大統領ジョン・アダムズの功績と人格を顕揚したもので、その資料はヘンリーの父チャールズ・フランシス・アダムズ編の『ジョン・アダムズ著作集』からえた。ヘンリーも、ジェファァーソンに焦点をあてたアメリカ建国時代の歴史の大著を出し、パウンドもまたジェファァーソンの功績と人格を賞揚した。

一八八六年(明・一九)、七月三日、ヘンリー・アダムズ(Henry Adams, 1838-1918)と画家ジョン・ラ・ファージ(John La Farge 1835-1910)が日本を訪れ、フェノロサ一家とともに、コレラの感染をさけて、日光でその年の夏を過ごした。さらに二人は、フェノロサとともに鎌倉、京都、奈良、岐阜へと旅行している。フェノロサ伝記における記念すべきできごとであった。二人は日本の美術品を蒐集し、三ヶ月在滞のち、十月二日、横浜港出航のシティ・オヴ・ペキン号で帰国したのであるが、この船にフェノロサ一家と岡倉天心が同船し、アメリカまで二人と行動をともにしている。フェノロサと天心はその船で文部省派遣のヨーロッパ美術教育調査に出発した。このことはフェノロサ、天心の伝記において、またわが国、明治美術教育史上あまりにも有名なできごとである。

リヘンリー・アダムズは、アメリカ第二代大統領ジョン・アダムズ(John Adams, 1735-1826)、第六代大統領ジョン・クウインシ・アダムズ(John Quincy Adams, 1767-1848)を出したアメリカ建国史上有名なアダムズ家の出身で、第六代大統領ジョン・クウインシの孫、第二代大統領ジョンの曾孫にあたる、これまた有名な歴史家、政治家、小説家であった。ハーヴァードを出て、父チャールズ・フランシス・アダムズ(Charles Francis Adams, 1807-86)の秘書をしてイギリスに滞在、帰国後は政界に入ることを断念して、母校で中世史、アメリカ史の歴史を講義した。その間『ノース・アメリカン・レビュー』の主筆をしたりしたが、大学辞

任後は著作に専念し、ワシントン社交界の花といわれた夫人とともに、アメリカ一流の建築家で、ハーヴァード同窓のリチャードソン(Ch. H. Richardson)設計の有名な「赤い家」に住み、有名人との社交をたのみながら幸福な生活を送り、アメリカ建国史の著作にはげんだ。「赤い家」は諸国の大使館や、「ホワイト・ハウス」さえくすんでみえたといわれるほどの堂どうとした大邸宅で、その家にはリチャードソン、リンカーン伝の作者ジョン・ヘイ(John Hay)、画家のラ・ファージ、有名な動物学者アガシ(Alexandre Agassiz)などが訪れ、またヘンリー・ジエイムズもたまたまその地を訪れた際にはその家を訪ねたといわれる。<sup>(1)</sup>

ところが突然に運命的な不幸が一家を襲い、アダムズはその後その打撃から立ちなおることはなかった。一八八五年のある日曜日の午前、かれが散歩中にかれの妻が自殺し、かれの生甲斐のささえは崩れ去り、生活は暗闇となり、一人でその家に住むに耐えず、ラファイエット広場のあたらしい家に移り住んだ。日記、ノート類、書翰を焼却し、かれは自分を死んだ幽霊かミイラのように感じた。かれはニルヴァーナ(Nirvana)をもとめて、翌年、ラ・ファージとともに日本に来遊した。ヘンリー・ジエイムズばりの小説を書き、また中世研究書のほかに、アメリカ建国の歴大な歴史の著作『ジェファソン・マジソンの統治期の合衆国史』(History of the United States During the Administrations of Jefferson and Madison. 9 Vols., 1889-91)九巻を著作した。

ラ・ファージは岡倉天心がアメリカの橋本雅邦とよんだ有名な画家で、ラファエル前派の影響をうけ、パリでクテュール(Couture)に学び、

ボストンのトリニティ・チャーチ (Trinity Church)、ニュー・ヨークのチャーチ・オヴ・アセンション (Church of Ascension) の壁画を描き、それらは、当代アメリカ最高の作といわれている。またステンド・グラスの製作にすぐれた技倆を示し、ハヴァード大、コロンビア大のチャペルのステンド・グラスの窓を製作して有名である。日本における印象記を書翰体形式にまとめた『画家東遊録』<sup>(2)</sup>の和訳が、久富貢、桑原住雄両氏によって最近出版された。

## 2

一九四〇年に出たパウンドの『キャンントウズ・五二——七一』は、前半の「キャンントウズ・五二——六一」がいわゆる「中国・キャンントウズ」で中国の歴史をそのテーマとしており、「キャンントウズ・六二——七一」がいわゆる「アダムズ・キャンントウズ」で、第二代大統領ジョン・アダムズの功績に焦点をあてたアメリカ建国の歴史をテーマとしている。パウンドは『キャンントウズ』の全著作を「歴史をふくむ詩篇」とくり返しのべたが、政治的な意味のニュアンスをふくむ偏見のため、あたかも芸術としての詩篇からはみ出たセクションであるかのように、「アダムズ・キャンントウズ」がなんとなく評家からみ過ごされがちなことは残念である。清新、澁刺としたアメリカ「建国の父祖たち」(founding fathers)の、人間の自然の権利としての自由を、史上無比ともいえる徹底した正義感でもって主張し、「すべての人間は平等に創られている」(all men are created equal)と、自由の樂園アメリカ合衆国建国を成就させた精神をた

たえたパウンドの「アダムズ・キャンントウズ」の重要な意味が認識されなければならない。

ここで、フェノロサとの関係でとくに注目したいのは、日本においてフェノロサと親しい交遊を結んだヘンリー・アダムズがパウンドの「アダムズ・キャンントウズ」と密接な関連があるということである。パウンドの「アダムズ・キャンントウズ」に重要な資料を提供したのは、さきにあげた、ヘンリーの父であるチャールズ・フランシス・アダムズであった。有名な法律家、政治家、外交官、歴史家として、下院議員をつとめ、イギリス公使となり、帰国後は歴史の著述に専念した。歴史家として『ジョン・アダムズ著作集』(Works of John Adams, 10 Vols., 1851-66)を編集し、この著作がパウンドの「アダムズ・キャンントウズ」に重要な資料を提供したのである。ここでとくに注目したいのは、チャールズ、ヘンリーの父子ともどもにアメリカ建国史の重要な著作を出していることで、父チャールズは第二代大統領ジョン・アダムズの著作集を編集し、その第一巻として「ジョン・アダムズ伝」を著作し、息子ヘンリーは、第三代大統領でジョン・アダムズとともにアメリカ合衆国独立宣言の起草にあたり、精神的に親交のあった、トマス・ジェファソン(Thomas Jefferson, 1743-1826)に焦点をあてたアメリカ建国史の大著を出していることである。チャールズ、ヘンリー父子ともに歴史家としてアメリカ建国期の歴史の歴大な著作をのこした。

「アダムズ・キャンントウズ」のなかに、またそれに関するパウンドの重要な論説「シュラインまたモニュメントとしてのジェファソンIIアダ

ムズ書翰集」(“The Jefferson-Adams Letters as a Shrine and a Monument”)<sup>(3)</sup>のなかにヘンリー・アダムズの名前が出ている。この書翰集はパウンドが「シュライン」、また「記念物」とよび、「アメリカに文明が存在していたという証拠を示すものとしてこれにまさるものはない」(一六七ページ)、と語っているものである。また「過去一七〇年の間にアメリカ合衆国にはアダムズやジェファソンが手紙を書いた人びとがいた時代よりもよりよき時代 (more civilized world) はかつてなかった」(一六七ページ)というものである。そして最後のしめくくりの文句として、ジョン・アダムズがジェファソンにあてて書いた手紙(二八二三、七、一五)の「八きみとぼくはおたがい理解し合うまでは死んではいけないのだ」というようなことばは、そのような状況の下(一七六〇—一八一三)で、ルソーも、モンテーニュも書けなかったようなことばなのだ」(一八三ページ)とのべている。

この二人は、ともにアメリカ独立宣言の起草に関与し、第一代大統領ワシントンの下でジョン・アダムズは副大統領、ジェファソンは国務長官をつとめ、第二代大統領ジョン・アダムズの下でジェファソンは副大統領となり、ついに第三代大統領となった。そして奇しくも同年同日、一八二六年七月四日に死去した。そしてこの七月四日はさらに奇しくもアメリカ合衆国独立記念日でもある。

ここで「ジェファソンのデモクラシー」(Jeffersonian democracy)としてとくに強調しておきたいことは、ジェファソンとパウンドの経済観念、道徳観、国家観に密接な関連があるということである。ジェファ

ソンは農をもって社会の根幹、富の生産者と考え、商人、資本家たちを社会の寄生虫とみなし、中央集権的政治機構に反対し、学芸を奨励してヴァージニア大学を設立した。これらはすべてパウンドの思想と密接な関連があるのである。

パウンドにはさきの論説のほかに、ジェファソンに関する重要な著作『ジェファソンと／またはムッソリーニ』(Jefferson and/or Mussolini, London: Stanley Nott, 1935.)があり、そのなかでパウンドは「最高の政府はもっともすくなく統治する政府である」(The best government is that which governs least)というジェファソンの金言を賞揚し、上からの統治でなく個人のこころの秩序から出発して、下から上に天下を治める、正しい民主的な孔子的治国を説いた。「農をもって社会の根幹と考えた」ジェファソンは、パウンドの「ユージュリ Usury」(自然の生産をともなわない金権、利潤追及の風潮)排斥思想とおどろくばかりにつうじているのである。

with usura

.....

no picture is made to endure nor to live with

but it is made to sell and sell quickly

with usura, sin against nature,

is thy bread ever more of stale rags

is thy bread dry as paper,

with no mountain wheat, no strong flour

with usura the line grows thick

with usura is no clear demarcation

金のため

.....

永遠のいのちある絵えがかれず

ただ売れるため、はやく売れるためえがかれて、

金のため自然にさからい

山の香かおる小麦粉の味うせ

なんじのパンぼろぼろカビくさ

なんじのパンばさばさ紙ぎれ

金のためことばの行ぼやけ

金のためくっきりとしたことばの輪郭なく

人はおのれの居場所うしなう。

この詩句は、「キャントウ・四五」、有名な「ユージュリ・キャントウ」

中のもので、おどろくばかりにさきのジェファースンのアイディアと一致している。そしてまた次章でのべる重要な「正名」思想のこだまをつたえているものである。金のために現代生活が腐蝕されていることの具体例をのべたもので、金のために芸術作品の創作態度が腐敗し、金のために文章はあいまいな表現となり、法律家のことば、国家のことば、は正邪の輪郭を失い、結局人は、人間の生の目的である楽園建設の夢から遠のいてゆくというデリュージョンをのべたものである。

3

「アダムズ・キャントウズ」は、アメリカ「建国の父祖たち」のなか

で、歴史家たちの無知な固定観念、「死んだことば」によって、第一代大統領ワシントン、第三代大統領ジェファースンの名の影の谷間に沈んだ第二代大統領ジョン・アダムズの「建国の父祖」としての地位の復権をめざしたものである。パウンドは「ネイション」としてのアメリカ合衆国は不可避免的に衰微しつつある。すでに衰微は相当に進行している。国民が建国の精神のはじめに帰り、アダムズやジェファースンの精神に帰らなければ、それを阻止することはできない、と真剣に考えたようである。パウンドは南北戦争後のアメリカの発展を進歩とは考えていないようである。その規準は、ことばが建国時代の清新さを失っていると考えたからとおもわれる。

この、アメリカ人としての真剣な愛国心の発露である「アダムズ・キャントウズ」が書かれたころの一九三九年春、パウンドは大戦の勃発を憂えて、戦争防止のための、アメリカ政府要人の説得に故国アメリカに帰ったのであるが、その企画はもちろん無益であった。そして数年後には、そのアメリカ合衆国にたいする「国事犯」として囚われの身となったことは実に皮肉であり、悲劇的である。ローマ放送のことを「アメリカ合衆国の憲法を守るため」とパウンドが主張しつづけたことも充分な根拠をもって首肯されるのである。

「アダムズ・キャントウズ」は全『キャントウズ』八〇三ページの十分の一を占める、十篇のキャントウズで、八〇ページにわたるものである。最初の「キャントウ・六二」は、さきの『ジョン・アダムズ著作集』の第一巻、編者チャールズ・フランシス・アダムズが完成した「ジ

ジョン・アダムズ伝」中のことばを克明に年代記的にたどり、革命前の本  
国と植民地との関係、革命前夜のボストンのできごとから説きおこし、  
革命の成功にいたる過程がのべられている。

さきにもふれたとおり、パウンドは『キャントウズ』を「歴史をふく  
む詩篇」とくり返しのべたのであるが、パウンドの態度が歴史家の態度  
でないことはもちろんのことである。パウンドの態度はむしろ逆で、歴  
史家の抽象ことば、偏見、クリーシェイからのがれて事実を確認し、物  
そのものとして提示することである。

パウンドはこの態度を、フローベニウスのことばをかりて「パイドウ  
マ Peideuma」という。意味の混乱をさけるため、フローベニウスはと  
くにこのことばをギリシャ語から借用した。「パイドウマ」の意味は「特  
定の時代の、特定の民族のメンタル・フォーメーション (mental formation)、  
伝統的思考習慣 (the inhibited habits of thought)、社会的条件づけ (con-  
ditioning)、能力 (aptitude)<sup>(4)</sup>と説明されるのであるが、要するに「特定の  
時代の民族の精神構造のリアリティ」と考えられる。パウンドにとって  
このことは「(歴史家たちによって) 死んだ意味を負荷されてしまった  
ことばから逃れて」<sup>(5)</sup>その民族の精神構造を直接に処理するということな  
のである。この意味で「アダムズ・キャントウズ」は、アメリカ革命期  
についての歴史家たちの固定意見としてのあやまったことばから、ジ  
ョン・アダムズの功績の事実を回復する「パイドウマ」なのである。  
「パイドウマ」とパウンドが同格に用いるのが孔子の「正名」思想で  
ある。

あたらしい「パイドウマ」、「CHING MING 正名」思想があらゆる  
学問を意識的に刷新する使命でもって出発するのだ。<sup>(5)</sup>

## 正名

「正名」、また「正」のイデオグラムが、「アダムズ・キャントウ  
ズ」をつうじて四ヶ所に印刷されている。『キャントウズ・五二——七  
一』の単行本の扉にまた「正名」のイデオグラムが印刷されている。  
「正名」思想は『論語』、「子路篇」が典拠である。

子曰、必正名乎……、名不正、則言不順。言不順、則事不成。事不成、則禮  
樂不興。禮樂不興、則刑罰不中。刑罰不中、則民無所措手足。故君子名之、  
必可言也。言之、必可行也。君子於其言、無所苟而已矣。

パウンドは右の下りを大要つぎのように英訳している。

名を定める (厳密な用語を決定する)。もしことば (用語) が厳密でなけれ  
ば、ことばは守られない、つまり特定の行為として完成されない。もし行為が  
真の焦点にもたらされなければ、儀式と音楽は栄えない。儀式と音楽が栄えな  
ければ、刑罰は不当なもの、的はずれたものとなり、人びとはどのように手足  
を動かしてよいかわからない。だから君子は正しくはなされることばをもたね

ばならず、はなされたことは実行に移されねばならない。君子のことは物に正確に一致し、乱用してはいけない。<sup>(7)</sup>

「正名」思想はすべての『キヤントウズ』の背後にあるものといわれる。この「正名」思想を、もっとも早い時期に、パウンドの精髓とみたのはヒュー・ケナーであるが、ケナーは「正名」思想が実感をもって読者に理解されないかぎり『キヤントウズ』はおろか、シェイクスピアさえも理解できないのだ<sup>(8)</sup>と断言している。右の「則民無所措手足」のパウンド訳「人はどのように手足を動かしてよいかわからない」は<sup>(9)</sup>であげた「キヤントウ・四五」の詩句の最終行「人はおのれの居場所うしなう」(and no man can find site for his dwelling)にあきらかに呼応している<sup>(10)</sup>と筆者はおもう。

パウンドの訳にみるかぎり、ことばに関する「正名」の意味は、ケナーの引く『大学』中のことばがふさわしい。「所謂誠其意見者、母自欺也。……故君子必慎其獨也。」のパウンド訳は「内心のトーンにマッチする正確なことばをみつめることは、自らをあざむかないことである。このために君子はひとりであるときでも心を眼にうつして眺めなければならぬ<sup>(10)</sup>。」とあり、「故君子必誠其意」は「このために君子は内心のさまざまな思想にマッチする精密な表現をみつければならない」とある。この、内なるところにそむかない「精密・正確」なことばをみつめる「正名」から出発して、パウンドは、子路篇にみる孔子と同様、法律家の正しいことば、国家の正しいことば、にまで拡大された「正名」の思

想の、天下、国家の治政に果たす枢要な機能をみる。

「正名」思想でパウンドが意図したことは『大学』の「欲治其国者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。」という意に尽されるとおもわれる。国家の経綸は人のところに発すということである。しかし、パウンドの意味するところは、われわれが受けた儒教思想のクリーシェイ化した意味ではけしてないことはもちろんである。パウンドはこれにつづく「欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。」を「<sup>(11)</sup>「<sup>(12)</sup>「<sup>(13)</sup>「<sup>(14)</sup>「<sup>(15)</sup>「<sup>(16)</sup>「<sup>(17)</sup>「<sup>(18)</sup>「<sup>(19)</sup>」を「<sup>(20)</sup>「<sup>(21)</sup>」を正しくすることをのぞむ者は、内心のさまざまな思想(心が発するさまざまなトーン)を厳密なことばで定義することを求める。厳密なことばで定義することをのぞむ者は、知識を最高にまで広めようとする。知識の完成は(物をオーガニック・カテゴリーに秩序だてること)にある<sup>(11)</sup>」と訳している。ここでパウンドの説く要諦は、われわれの有名な「格物致知」の思想に到達するのである。ケナーはこの下りを引いて、これが「パウンド理解のキーであり、『キヤントウズ』の根底にあるものである<sup>(12)</sup>」という。

「格物致知」の思想は、古来数十の解釈があるといわれるが、通常は「朱子説」が採用され、「事物の理をきわめ知識を深くする」ということである。パウンドはこれを「物をオーガニック・カテゴリーに秩序だてる」と訳している。

ここではその理由を説く場ではないが、筆者は、この「格物致知」思想が、パウンドの「イマジズム」、「イデオグラム手法」と深いかわりがあることに注目したい。

パウンドが『大学』を訳したのは一九二八年であった<sup>(13)</sup>。その後なんどか改訳されて一九五一年版の現在に到っている。こうした背景において、パウンドのころをもっとも強くとらえたのは、「正名」イディオグラムにかれがみた、現代世界におけることばと文化との密接なかわりあいであった。

「アダムズ・キャントウズ」はこの「正名」思想でつらぬかれている。ケナーは、「アダムズ・キャントウズ」はアダムズの『論語』である<sup>(14)</sup>といった。「子イワク：」と説く論語にあやかれば、「アダムズ・キャントウズ」は「アダムズイワク：」と、アダムズのことばがならべられた「アナレクツ」だというのである。

#### 4

ここで孔子を引合いに出した、「正名」に通ずるフェノロサのことばを紹介することとする。一八九八年、東京高師での講義原稿「文学論序説」(“Preliminary Lectures on the Theory of Literature”)中にあるものである。「文学論序説」は、百数十頁におよぶ壮大な、ユニークな文体論である。残念ながら、この遺稿は現在、ハーヴァード、ホートン図書館に属し、あきらかに重要な文学遺稿でありながら、パウンドの手にはわたらなかつた。一九二〇年、競売に付されて現在にいたったものである。パウンドはフェノロサの中国文字に関する講演遺稿を『漢字考』(The Chinese Written Character as a Medium for Poetry)として出し<sup>(15)</sup>「あらゆる芸術の基盤」といった。「文学論序説」遺稿がもしパウンド

の手にわたっていたら、それはきっと出版されて、堂どうたる文学論として、二十世紀文学の展開に重要な影響をおよぼしたとおもわれる。エリオットの「伝統論」に酷似した所説がふくまれている。このなかでフェノロサは孔子を引いて「正名」に関連のある興味ある説を提示している。

フェノロサは、文学の原理が、中国哲学、とくに孔子哲学、そして易学の原理、「乾」、「元」、「亨」、「利」、「貞」にふさわしく表現されているとのべて、まずギリシャ語の「ロゴス」の意味がことばであることから説きおこしている。「正名」思想に通ずるその一部をあげておくこととする<sup>(16)</sup>。

フェノロサは、ヨハネ福音書の冒頭のことば、「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…この方へのちがあった。このいのちは人の光であった」が奇跡に近いほど孔子哲学に似ているという。

孔子の説く「文」は、まず「ことば」の意味であるが、同時にもの「アヤ」、「物の調和原理、物に内在するリズム」を意味するとフェノロサはいう。英語の「シヴィライゼーション」(civilization)を意味する「文明」という熟語の語源の意味は「ひかり」と「人間」の調和を意味する。フェノロサはその他、「斯文」、「人文」、「天文」、「文学」、「文章」などのことばを説き、「ことばのなかに人間のひかりがあった」という。

このようにしてフェノロサは十数ページにわたり、孔子哲学のなかに



かれの文体論にふさわしい例証をみて、かれの所説を展開している。

## 5

二十五才よりその最晩年にいたるまで、フェノロサの生涯は日本とアメリカを往復した生涯であった。一九〇〇年かれは、最後に、日本をあきらめてアメリカに帰った。それは、フェノロサ文学遺稿を検討したパウンドが「かれはアメリカの文芸復興をめざしていた」というとおり、南北戦争後の活気にみちたアメリカの知的発展に寄与したいという大きなビジョンのためであった。フェノロサ研究にアメリカでの豊富な資料の在り場所を提供して、現在の日本におけるフェノロサ研究に大いに貢献したチゾム (Lawrence W. Chisolm) は、「アメリカでのフェノロサの講演活動の開始を『A Passage to Indiana』(「インディアナへの道」)の章を設けて詳述した<sup>(17)</sup>。このことばは、ホイットマンに由来し、E・M・フォスターにあやかり、さらに、東西文化のクロスファーターライジエイションに重要な貢献を果たしたフェノロサの貢献にあやかっただものである。フェノロサは、インディアナ州ウーナ湖畔の「シヨトックワ夏季大学」<sup>(18)</sup>の他に講演活動を開始した。「シヨトックワ夏季大学」とは、南北戦争後の急速な知識の普及に貢献した成人教育機関で、毎夏、数千の参加者を集めたといわれる。

南部の旧体制が瓦解し、あたらしい体制を産んだ南北戦争後のアメリカと、封建藩制からあたらしい近代国家として生まれ変わった維新後の明治期は、時代的に一致し、きわめて類似点があるとおもわれる。南北戦

争後のアメリカはアメリカ維新とよぶにふさわしい。フェノロサは明治維新の日本の芸術教育に決定的な役割りを果たし、さらにアメリカに帰って、アメリカの芸術教育、アメリカの文化の発展に、突然の死によって断たれたとはいえ、大きな足跡を残そうとしたのである。フェノロサの意図は、「フェノロサIIダウ方法式芸術教育法」<sup>(18)</sup> (The Fenollosa-Dow System of Art Education)としてアメリカの土壌に成長の樹をのこした。この芸術教育法はいまなおカリフォルニアの一部でおこなわれているという。フェノロサは一九〇〇年、アメリカに帰国後、一九〇八年の突然の客死まで、講演と著作に精魂をかたむけた。

アメリカ建国の歴史に決定的な足跡をのこしたアダムズ家は、一門から二人の大統領、おおくの政治家、また歴史家を出した。おおくの歴史家を出していることはきわめてシンボリックで、一門に建国の父祖たちを出したプライド意識があったからだとおもわれる。『ジョン・アダムズ著作集』十巻を編集し、パウンドに資料を提供したチャールズ、ジェファースンの統治期の『合衆国史』九巻の大著を出した息子ヘンリー、そしてヘンリーの兄チャールズ Jr.もまた歴史家で、「ユニオン・パシフィック鉄道会社」の社長をしたのち、マサチューセッツの歴史をなんらか書き、そしてヘンリーの弟ブルックスもまた歴史家で因襲的な見方を脱したユニークなニュー・イングランドの歴史を書き、またアダムズ一家の知的伝統に関する文書を書きのこしている。

ヴァン・ワイク・ブルックスに (Van Wyck Brooks) 「ニュー・イングランドのこころ」を主題にした一連の著作がある。『花開くニュー・イ

ングランド』、『ニュー・イングランド小春日和』、『フェノロサと仲間たち』<sup>(21)</sup>がそれらである。『小春日和』、『フェノロサと仲間たち』のなかでは、フェノロサ遺稿に関し、パウンド、イエーツも言及されている。「ニュー・イングランドのこころ」は、政治的には東部十三州の連合としてかがやかしいアメリカ合衆国建国の歴史として花開き、とくに南北戦争後は、より広い領域へと伝播していった。

パウンドは「もっともアメリカ的な作家」といわれるが、「アダムズ・キャンントウズ」で、清新なアメリカ建国の精神を、物欲で荒廃したとかが考えたアメリカの社会に、ふたたび復活させることを真剣に考えたのである。

アーネスト・フェノロサ、ヘンリー・アダムズ、エズラ・パウンドは、それぞれ異なった生涯を歩みながらも、ともに深く東洋を志向し、アメリカの歴史と深く関与した。パウンドの「アダムズ・キャンントウズ」は一九四〇年の出版で、一九〇八年死亡のフェノロサ、一九一八年死亡のヘンリー・アダムズ、とはずいぶん時間のずれがあるわけであるが、時間的なギャップを超えて、「アダムズ・キャンントウズ」を介して三者はふしぎな糸で結ばれている。

## 6

一八七六年（明・九）、札幌農学校でたった一年教えたウイリアム・クラーク（William Clarke, 1826-86）は「少年よ大志をいだけ！」<sup>(22)</sup>といって内村鑑三などを深く感化したが、ニュー・イングランド、マサチューセ

ッツ・マンであった。おなじくマサチューセッツ・マンのフェノロサは、クラークにあやかれば「日本文化よ大志をいだけ！」<sup>(23)</sup>といったことになる。われわれは、こうした態度の背後に深いニュー・イングランドの伝統的精神をみる。ヘンリー・アダムズは、あまりにも偉大なニュー・イングランドの伝統の渦中の家系アダムズ家に生まれ、アダムズ家の光輝ある歴史の伝統の最後のがやきのような立場であったが、夕焼けのようなニュー・イングランドのこころを発光している。パウンドは資本主義が成熟した「ユージュリ」の土壌のアメリカに、建国の精神のルネッサンスを夢見た。アーネスト・フェノロサ、ヘンリー・アダムズ、エズラ・パウンドの三者のなかにわれわれは、それぞれの立場をこえて通ずる「アメリカ魂」とでもいえる、ニュー・イングランドの精神の伝統をみる。

## 註

- (1) Van Wyck Brooks, *New England: Indian Summer* (New York: E. P. Dutton, 1940), pp. 354-55.
- (2) *An Artist's Letters from Japan* (New York: The Century Co., 1897), 『画家東遊録』（中央公論美術出版、昭・五六）。
- (3) *Impact: Essays on Ignorance and the Decline of American Civilization* (1937, rpt. Chicago: Henry Regnery, 1960), pp. 166-83.
- (4) *Ibid.*, p. 168.
- (5) *Guide to Kulchur* (London: Faber, 1938), p. 57.
- (6) *Ibid.*, p. 58.
- (7) *Confucian Analects* (London: Peter Owen, 1956), pp. 79-80.
- (8) *The Poetry of Ezra Pound* (London: Faber, 1951), p. 47.

- (9) *Ibid.*, p. 107.
- (10) *Confucius: The Great Digest & the Unrubbable Pivot* (New York: New Directions, 1951), p. 47.
- (11) *Ibid.*, p. 33, quoted by Kenner in *The Poetry of Ezra Pound*, p. 37.
- (12) Kenner, *The Poetry of Ezra Pound*, p. 37.
- (13) *TA HIO The Great Learning: Newly Enlarged into the American Language* (Seattle: Univ. of Washington Book Store, 1928).
- (14) *The Poetry of Ezra Pound*, p. 48.
- (15) 参照、『詩の媒体としての漢字考』(東京美術、昭・五七)。
- (16) 参照、村方明子、「フェノロサの文学真説」、『英文学評論』第四一集(京都大学教養部、昭・五四、三)、「二二八—四二二ページ」。
- (17) *Fenolosa: The Far East and American Culture* (New Haven: Yale Univ. Press, 1963), p. 153.
- (18) *Ibid.*, p. 177.
- (19) *The Flowering of New England* (New York: E. P. Dutton, 1936).
- (20) Cf. n. 1.
- (21) *Fenolosa and His Circle* (New York: E. P. Dutton 1962).
- 本稿は「フェノロサ研究の新しい視点を探る」(日本フェノロサ学会、第六回大会シンポジウム、於東京芸術大学、昭・六〇、九、七)、「エズラ・パウンドの百年」(日本エズラ・パウンド協会、第七回全国大会—エズラ・パウンド生誕百年記念—シンポジウム、於関西大学、昭・六〇、一〇、三〇)にて講師として発表した内容にもとづく。

〔一九八五年十一月八日受理〕